

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『リフカの旅』

カレン・ヘス 作／伊藤比呂美・西更 訳（理論社、二〇一五）

西 成彦

一〇世紀のユダヤ人がヨーロッパで味わった悲痛な体験と言えば、『アンネの日記』で知られる「ホロコースト」が有名だが、南北アメリカに逃れるなどして「ホロコースト」の被害は免れたとしても、命からがらヨーロッパを脱出したという記憶を受け継いだユダヤ人は少なくない。本書は、ロシア革命が起こって、内戦状態におちいったウクライナから家族とともにアメリカへの旅に出たものの、その旅の途中で、親から置き去りにされ、それでもたくましく生き延びて、最後にアメリカへとたどり着いた少女の話だ。作者のカレン・ヘスさんは、アメリカ生まれだが、ウクライナからやってきたという家族のルーツをさぐるうちに、大伯母さんから昔話を聞くことができ、そこからこの作品が生れたのだという。

いまシリア難民がヨーロッパにやってくる話がニュースでもさかんに報じられているが、そうした経験は、じつは遠い国の人々の経験であったと言え切れない。日本人もまた七〇年前の敗戦後、何百万人もが「外地」で難民と化して、着の身着のまま、「引揚げ」の途についていたのだ。アメリカでは、一九八六年にそうした「引揚げ」の経験を持つヨーコ・カワシマ・ワトキンスさんが『竹林はるか遠く』を書き、それも日本語になっている（都竹恵子訳、ハート出版、二〇一三）。『リフカの旅』とともに、アメリカでは中学生向けの推薦図書だ。「移民の国」であるアメリカは、戦乱や人種差別の地を逃れて、「平和で民主的なアメリカ」に抱きかかえられるというハッピーエンドの物語が、好んでもてはやされる。しかし、日本の子どもたちにとっても、「引揚げ」を含めた「難民」の物語に触れておくのは悪くない。

親とともに楽しく旅をしながら、ふと親からはぐれてしまうのではないかという不安におののいた経験が遠い昔にありさえすれば、大人でも、読めば、ついのもりこんでしまう。人間という生き物は、何度も遺棄されそうになって、それでもたくましく成長していくものなのだ。

（立命館大学 先端総合学術研究科 教授）